託された魔通師と守った魔通師

詩句谷　田茂利

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
託された魔通師と守った魔通師

【Ｎコード】
Ｎ９７７６Ｙ

【作者名】
詩句谷　田茂利

【あらすじ】
へたれたニート、北谷蒋一は中卒であり、一日中パソコンの前で遊んでいるだけのダメ人間。エロゲを買いに久しぶりに外出した時、彼は武装集団に追われている少女、エレーナとばったり会う。エレーナは蒋一が魔術師だと説明し、蒋一は彼女と彼女の周りの魔術師に会う事で現代社会の裏、魔法の社会を知る。楽しく彼女と他の仲間と過ごしながらも、蒋一は魔術師達の血塗られた戦争に巻き込まれる。そして、その時になって彼はエレーナの存在を理解する。時には笑えて、時にはシリアスなファンタジーバトル／コメディ小

説！（なのでしょうか？ここは読者が決めるものなので笑）

プロローグ－僕が「普通」であった頃

プロローグ

北谷蒋一。それが僕の名前。外見はミディアムの黒の髪、黒と言っていい程濃い茶色の目である。背丈はおおよそ１７０センチであり、おおよそ平均である。顔立ちは悪くなく、イケメンかブサメンかのどちらかに分類されなくてはいけないのならば、イケメンの方に属するのだろう。しかし、これが僕の唯一の取り柄と言ってもいいだろう。なぜなら、僕の実際の人生は一般的な社会観点から言えば、最低の人生であるからである。成績はオール一、運動能力は１ｋｍ歩くだけでもうボロボロ、リア充がｙであったら、必ず僕は－ｙである（要するに、僕とリア充の関係はｙ＝－ｘの一次関数？いや二次関数か？まあとにかくとちらかにより表せる）。これと言った特技／趣味はない。

こんなだめな男を、冷酷な親は見捨てた。父親は大手会社の部長、東大卒である。そんな父は、今は別居中。そこまで僕が嫌いであったらしい。母は父の事を愛していて、父も母の事を愛していたらしいが、このようなダメ息子と一緒にいるのが耐えられないと思いはじめた。それは僕が中２の時。その時、二人とも僕を捨てたかったらしいのだが、子供を親の介護無しに放っておくのは違法である為、二人はコインを投げて、負けた方が僕を養い続ける必要があるという事になった。父が勝ち、母は負けたので、現在に至るまで仕方なく僕と一緒に住んでいる。

僕には琴音という妹もいる。妹は、正直言って結構可愛い。な、妹についてこんなことを言うエロゲ中毒は僕の事だ。妹は普通の成績、普通の全てであったが、全てがカス同然であった僕の事を慕ってくれた。しかし、それは彼女が中一、僕が１６歳（なぜ高一と言わないという理由は、僕が中卒であるからだ）の時、彼女は保健体育で、なぜ僕が部屋の中に長時間篭城して、ハァハァいいながら、「〇〇

たん」と言っている理由を学習したらしく、それ以来妹とはご無沙汰だ。
最近、僕は部屋の中にずっと篭城している事が多い。それは部屋の中でしか暮らしたくない僕、そして僕の顔も見たくない親（まあ母だけなのだが）と妹の両方の願望を叶えている為、一石二鳥である。ちなみに、食べ物は扉の下の小さな長方形のような開く扉から入れられる。尿意の時は、しょうがない。トイレに行く。しかし、これは夜中の3時とかに行われるので、家に支障は出ない。
非常に楽しい生活である。まず、好きな時に起きる事ができ、好きな時に寝る事ができる。それに僕は中卒だから（オール一ですからね、しょうがないと言えばしょうがない）、勉強もしなくていい。一日中、好きなだけニ〇ニ〇動画を見、どうしようもないコメントを書き、3ちゃんねるなどに投稿し、つまらなくなればネトゲでもやり、それでさえ終わってやる事が全くなくなった場合、まあエロゲでも立ち上げ、後は御察しください。このサイクルを僕は眠くなるまで繰り返す。そのようにして日々は過ぎ去るのであった。
しかし、何故か僕はこのとある日に理由もなく、久しぶりに外に出ようと思った。
これが自分の人生を完全に変貌するとは知らずに…正直言って、僕はよく想像するのである。もしこの日僕が外出しなかったら、僕の人生、僕の家族、世界情勢、魔通師と呼ばれる特殊な魔術師のグループの人間、名も知らぬ多くの人々、そしてこの中で最も大切である、この魔通師達に利用された可哀想な金髪の少女の人生はどう違ったのだろうか？これは答えられない質問であろう。だからといって、僕は問う必要はない、とは思わない。元々、問って答えが戻って来る質問等、数が知れているのだから。これは、人生をニートとして謳歌しよう、と思った中卒の少年の観点から描かれた、世界最高峰のアメリカの軍隊等あっさり倒してしまう力を持った魔通師と呼ばれる魔術師と彼らの一員の金髪の少女についての物語の、序章である。

プロローグ－僕が「普通」であった頃（後書き）

え～、こんにちは。初投稿です。
作者は詩句谷田茂利をペンネームとして使っている人間です。現在中学三年生、受験生です。しかし、受験なんかほっぽって小説を書いている、ある意味頭の逝かれた人間です。ちなみに、人生の三分の二を米国で暮らしている人です。だから、小説内の文法とかグチャグチャかもしれません。
小説を書きはじめたのは、とある友達達との会話で、小説を書こうか、と言う話題が出たのがきっかけです。それは２０１１年の６月位だったと思います。最初はおもしろ半分でしたけど、その時から僕達は全員小説を書いています。この小説は、僕が９月あたりから書きはじめた小説です。どうぞ温かく見守ってみて下さい。
後、批評は是非御願いします。できる限りこれ（この小説）を良いものにしたいので。勿論いいコメントも欲しいです！
読んだ後感想、又は評価点を付けて頂けると嬉しいです！
では、第一章のときまたお会いしましょう。

一章ー金髪の少女と面倒な事件（前書き）

ここまでのキャラ：北谷蒋一ー主人公。中卒のヘタレ。
わかりにくい単語：レイピアー細長い両刃の剣。片手で器用に使える軽さが利である。
サブマシンガンーフルオート射撃（引き金を引き続けるだけで弾が出続ける）の銃。拳銃より大きく、ライフルよりは小さい。短機関銃とも呼ばれる。
機関拳銃ー拳銃位の大きさのサブマシンガン。

一章ー金髪の少女と面倒な事件

いや、訂正しよう。理由はあった。俺の家はすごい事に、秋葉原にある。そこのメイド喫茶の女の子と会って、エロゲを更に購入する為に外に出た。なぜ久しぶりかと？最近はコンピューターがあれば、欲しい物はクリックするマウス、欲しいもの売っているサイト、そのサイトの登録番号、そして金しかいらないからだ。僕はもっぱら働き等しないが（だってそんなの負け組のする事だろ？）、一応母が僕に小遣いをくれる。なぜかと言えば、妹だけに与え、僕に与えないのは周りの人間から見て不自然であるからである。それが、稀に僕が妹と母と顔を合わせる時である。週に一度、小遣いをもらう為に数秒間お互いの顔を見る。今日はその小遣いをもらう日である。大変いやな作業である。まず、僕が、皆がいる時に、食卓へと家の一階に下りる。そこにはできる限り僕と目を合わせないようにと努力をしている母がいつもいる。彼女は別になにもせず、待機しているだけである。僕は階段を下りた後、ゆっくりと食卓へと向かう。そこには、よくトーストを口にくわえたまま学校に行く為の準備をしている妹の琴音がいる。彼女は別に僕と目を合わせないようにと努力はしていないが、別に僕の方を向いてなにかを言う訳でもなく、何らかの感情を顔に出す訳でもない。僕は食卓の椅子に座る。それが全ての合図であるように、母は財布から千円札を数枚抜き取り、五百円玉をその数枚の千円札の上に乗っける。五百円玉の上に指を置き、札を押さえる。母は指を後ろに少し引っ張り、そして指を僕の方へと素早く動かし、札と五百円玉を滑らせる。五百円玉が効果的なおもしとなり、札は押さえつけられる為、札と五百円玉はガラスのテーブルを華麗に滑っていく。僕のいる反対側まで滑って来ると、僕は自分の小遣いがそれ以上滑るのを阻止する為手で押さえつける。その後、僕は金の量を確かめる。千円札が二枚。もちろんおもしである五百円玉一枚。計二千五百円。そして、僕は自分の部屋

へとゆっくりと戻って行く。非常に面倒で大変な作業であるが、収入を得る為の代償だ。この苦難を糧に、僕はエロゲを手に入れる事が出来る。
そして僕は金を得ると、自分の部屋の中で待機する。そこで僕は母が外出するまで待つ。彼女が外出すると、僕は数分待ち、こっそりと外出する。そして僕は自分のショッピングをしに繁華街の方へ出る。着いた頃にはもう昼は過ぎていて、太陽はゆっくりと落ちていた。いわゆるまだ夕方ではないけど、かなり夜に近づいている時間帯である。おおよそ四時半だろう。エロゲは簡単には手に入れられた。問題はメイド喫茶の方であった。入ろうとしたら混んでいて、一時間程待つ必要があると言われた。
今考えてみれば、なぜここでメイド喫茶を諦めなかったのだろうか？と思う。僕はこの瞬間の自分もよく問う。なぜ諦めなかったのだろうか？そうすれば僕は、苦労はしなかった筈だ。しかし、その分様々な人間が苦労をしたのだろう。今僕はその人達を知っていて、自分にとって大切な存在であるから、絶対に自分が様々な苦労した方が絶対にいいと思う。でも、この時の僕はその時の人達を知ってさえいない。なぜ知らぬ人間の為に僕が苦労をしなくてはいけないのだろうか？と言う風に僕は考えただろう。これは客観的に見て普通の思考ではないのだろうか？このような考え方が普通である人間の社会は果たしていいものであるのだろうか？このような考え方があるから、あの少女は苦労しなくては行けなかったのではないのか？人間と言うものは、非常に冷酷で、そのせいで色々な問題を引き起こす。しかし、それを知る人間は数える程しかいない。
とにかく、僕はメイド喫茶からそう遠くない所にある普通のコーヒーショップで暇をつぶす事にした。そこで僕はモカを頼み、クリームとモカをストローで混ぜながら、暇をつぶす。
「はぁ。早く待ち時間終わらないかなあ」僕は溜め息をつく。そして、少しモカを飲む。ああ、甘くて冷たい。これこそ、最高のドリンクだ。

バシャッ！この冷たさがいい！あれ、でもなんで冷たいのがシャツに？げっ。そのとき僕は何者かによって僕のモカがシャツに飛び散っていた事に気がついた。こんな格好でメイド喫茶には入れない。着替えなくちゃいけねーじゃん。で、着替えている間に空きができて、戻ってきた時にはその空きが他の人間にとられて、もう一時間待つなんて展開は…許せん！

「おい、誰だよ、人に人のモカぶっかけといて、謝らない馬鹿は！」そうすると、僕は不思議な杖を持った女の子と顔が会う。どんな娘かも知る前に、彼女は謝ったー訳じゃない。さらに要求を押し掛けてきた。

「キミ！ボク達は君の力が必要なんだ！」

「何だよ、人に迷惑かけて、今度は児童向けの某ヒーローにでもなったつもりか？スペシウム光線なら、自分で撃て」僕は言い返す。

「ほんとに！キミじゃないとダメなんだ！！！」彼女はある聖書のような本を出す。それは、外側は青く、聖書としか思えなかった。しかし、彼女はあるページへと捲ろうとする。結局興味を持ってしまった僕は彼女に怒るのを忘れ本の中をのぞく。

「キミの力でどーにかー」

「何だよ、この奇怪な文字は」

「これ、漢字だよ！？日本人だよね？」

「えっ？うーん」ある文字をよく観察してみる。うーん、三つ点が縦に並んでいる…それから、「人」という漢字が二つ縦に並んでいて、各「人」には、左右に二つチョンがあった。わからないけど、三つの点は…どういう意味だっけ…ああ！さんずいか！で、人に左右の二つのチョンは「火」か！！さんずいが左にへんとしてあり、火がつくりとして二つ…全く僕はバカか、漢字という物は意味を成し、さんずいの意味は水で、二つの火は火の意味だ。お互いに消し合う物を一つの漢字に入れてどうする？考えてみれば考えてみる程、ばかばかしく思える。「淡」。こんな漢字があったら、日本は破壊されるよ。お互いに反発しあうような部分をくっつけた漢字等あっ

てたまるか！僕は少女にこれは漢字に非常に似ているけど、漢字でないという事を説明しようとするが、彼女は後ろを恐怖の目で見る。
「あぁ…うーんもぅ！来ちゃったよ！！」彼女は唸る。全く変な少女だなあ。
　コーヒーショップの前からは、黒のスーツ、黄色と赤のネクタイ、カッコイイグラサンをかけた、怪しい男達が来る。更に怪しいのは、銃刀法のある日本で、彼らは様々な武器を持っていた。サーベル、レイピア、拳銃、サブマシンガン、刀、マシンピストルとかである。一人だけ青と緑のネクタイを付けた怪しい男が一歩前に出る。彼はレイピアを抜き、周囲の人は剣が抜かれる音に驚き、逃げる。そして、僕の隣にいた少女に刃先を向け、彼女に呼びかける。
「トーラ。お前の命はここで終わりだ。その書物の内容は知っている。自分の組織だけで所持して、大量の人間を殺傷させるわけにはいかない。平和な変化を求めているＡＡＮＭＦを代表して言う。書物を渡せ」
「あなた達のやっている事のどこが平和なのよ！！」
喋っている男は彼女を無視し、「仕方がない。殺せ」おいおいおい、いきなりどうなってるんだ！？
銃が発射され、僕はとっさにテーブルを倒しその後ろに隠れる。弾がなぜか一発もあたらなかった事実をそこで知る。僕は自分の運の良さに感謝し、とにかくそのトーラとやらと言う名の少女が攻撃される所を待つ事にした。
標的は僕ではなく、彼女である。彼女がまあ死ぬまでか、降伏するまでかは分からないが、とにかく彼女がいなくなれば僕は安全だ。知らない人間だ。どうなっても、はっきり言って知らない。このように殆ど全ての人間は考える。人間と言うものは、冷酷である。
しかし、少女は別の考え方を持っていたらしい。彼女はどうやってか分からないが、そこら中にあるテーブルを触れずに移動させていた。テーブルは僕の周りに移動させていた。彼女も自分の周りにテーブルを配置し、それを盾のようにして後ろに隠れている。

「移動魔力か…」レイピアを持ったスーツの男は言う。「テーブルをそこまでのコントロールと速度で正確に移動。。。階級は橙辺りか？まあ本の所持者だ。ザコに持たせる訳はないか」
「軽装戦闘部隊にやられる程、ボクも弱くないもん！」
「よくも我ら軽装戦闘部隊をバカにしたな。。。」レイピアを持った男は静かに言う。「追え！接近戦でやってしまえ！」スーツの男達は銃をスーツの中にしまい込み、腰に下げていた刀剣類を出す。少女は剣を抜いた男達とどうにか戦おうとするが（武器もないのにどうやって戦うのだろうか）、後ろからも定期的な援護射撃があり、テーブルの後ろの隠れる以外に彼女はなにもできない。そして、彼女は杖をテーブルの上に載せ、襲いかかってくる男にそれを銃のように向ける。杖は先から電気のようなものが込み上がり、弾丸のようにその電撃は男に向かって飛ぶ。
「ぎゃあああ！！！」剣を落とし、その男は倒れる。残りの男達もそれに気が付き、一瞬攻撃を止める。少女は杖から電気を溜め、彼らに向け、連中が近づかないようにしながら、僕の襟首をつかむ。
「キミ、早く！！」そして、そのまま僕を引きずる。僕は、彼女が僕をここまで助けてくれる事実をありがたく思うべきなのだろうか。しかし、僕がこのような問題に巻き込まれたのは彼女のせいである為、ありがたく思いにくい。
「追え！追え！」隊長らしき男は叫ぶ。男達は更に僕たちを追いかけ、銃弾が僕達の周りに当たる。
「ちょっと、ボク、キミをずっとこんな感じでずっと引っ張れないよ！自分で走ってよ」
「ああ」僕は走る。しかし、一日平均百歩歩くか歩かないかの生活を営む僕にとっては、電車に乗ってここのメイド喫茶にくるだけで相当体力が消費されてしまっている。走るなんてとんでもない！しかし、僕は走る。弾丸に当てられるのはごめんだ。人々は武器を持ったスーツの男を恐れて、僕達と彼らの為に道を開ける。
「ちょっと、休憩をしないか？」僕は少し経つと訊く。

「って、キミ走りはじめた時からまだ数秒しか経ってないよ！？」
うむ。という事は、僕はまだ５０メートルも走っていない訳だ。しかしこれ以上走るのは限界への挑戦、って感じだ！
「でも疲れた～～」と僕は文句を言う。少女はもう一発電撃を撃ち、サブマシンガンをそこら中に撃ちまくっていた男を撃ち落とす。しかし、僕達の目の前にももう一人男がいた。
「バカめ！」サーベルを持った、気味悪い笑みを浮かべた男がサーベルを少女に向かって、上から斬る。少女は杖で守り、一回男を杖で当てる。
「全く、お前はどんな馬鹿だよ！なんで、後ろから僕達に絶対当たらないものを撃っている人間より先に目の前にいる奴を撃ち落とせば良かったじゃん！」僕は筋の通った事をいいながら、走りを止める。息が荒い。
「そんな事を説明している暇があるんだったら、こいつを殴ってよ！キミだってなにもしてないじゃん！ボク女の子だもん！勝てないよ」確かに。ここは僕が一肌脱ぐか。僕の真の力をなめんなよ！！いくぜ！ストレーーーーーート！！！そして、撃つべし！撃つべし！ノックアウトーーーーーーーー男はぶっ倒れた。たりめーだ。僕をなめんじゃねーぞ。
「すごい！」少女が叫びながら、目を輝かせている。
「げっ！こいつどんだけつぇーんだ！！総勢撤退！」男達は、僕の凛々しい一発のパンチにより即ノックアウトになった男を見て、情けなく散り散りに逃げた。
「やっぱり！やっぱりキミがいなきゃ、ボク達は死んでたよ！ほんとに、ほんとにありがと！」
「ふふっ。この力を、僕は見せたくなかったんだけどね。ちょっと！」少女が僕の体に抱きついた。
「ほんとにありがと！」彼女はもう一度言う。これって…！！俺はリア充になったのか？リア充！？リア充だぜ！人生負け組なのに、リア充だぜ！！！ふふっ。まじめに高校に行ってたバカ共め、リア

充になれるのは、やはり限られた人間なのさ。侍みたいなもんだ。人はリア充にはなれない。リア充に生まれるのだ。
こうして、僕は人生の勝ち組の世界の住人になったのであった。

な～んてことがあったらいいよね。
ごめんなさい。僕が男を一回殴って倒した所から下に書いてあった全て。それは完全な嘘です。現実に戻りましょうね。全く。今から本当に起こった事を書きます。
ここは僕が一肌脱ぐか。僕の真の力をなめんなよ！！いくぜ！ストレーーーーーート！！！そして、撃つべし！撃つべし！ノックアウトーーーーーーされたのは僕だった。僕のストレートは当たった。しかし、男は何も感じなかった。何回殴ろうと、彼はびくともせず、僕と男の間には情けない空気が数秒間漂う。僕が無駄なパンチをやめると、彼はグラサンを越して僕を見つめ、そして僕はサーベルの柄で鳩尾にやられた。そしてノックアウトーー。情けない。こんなことやっていては、俺の夢であるリア充には絶対になれねー。
「こ、こいつなんだったんだ。この弱さ吹ける」男が笑う。
「はぁ…君、知性もダメダメだけど、身体能力も全然だめだね」少女まで戦いをやめ、溜め息をつく。そ、それを言うな！僕のただでさえないに等しいプライドが！！僕のただでさえ底辺に近い評価が！これじゃ、プライドなくなっちゃう！お願いだからバカにしないでくれ！
「死にな」男は言う。プライド云々の前にこちらを心配した方が良かったかも。
僕は全てを諦めた。ここで僕の人生は終わるのか。まあダメダメな人生だったし。仏教によると（あれキリスト教だっけ？）、転生してもう一回人生やり直せるんでしょ？それならいいや。そして、僕の閉じそうな目が、白銀の刃が僕に落ちてくるのをみた。
「もうやめて！」少女が叫ぶ。「彼はたまたまボクの近くにいただけだよ！」彼女がまた電撃を撃ち、彼を倒す。しかし、その時には

スーツの男達が僕達の近くに駆けつけていて、僕と彼女を囲んでいた。銃や剣が彼女と僕に向けられた。彼女は杖を構え続けていた。警察も駆けつけていたが、本格的な武装をした集団に抵抗できる筈がない。彼らは、人が僕達に近づかぬよう、検問をしているだけか、造園を読んでいる最中かだ。その為今僕達の周り弦径…じゃなくて半径１５メートルには昼の秋葉原であるというのにだれもいない。

その半径１５メートルを利用して、スーツの隊長はレイピアを鞘に納め、その代わりに杖を内ポケットから抜き、杖を地面にひきずる。そうすると、白いチョークのようなものが道のアスファルトに浮かび上がる。杖で彼はおおよそ弧径…じゃなくておおよそ半径五メートル程の円を描く。その円の中に、星を描き、更にその星の中に三角錐…じゃなくて三角形を書く。

「ベヒーモス様！」スーツの隊長が言う。「見つかりましたよ！捕獲もしました。」

それが魔法の呪文のように、まずチョークみたいな分質が光る。円が炎上する。その炎は、最初は線の上を僅かな火が燃えている程度であったが、だんだんとその炎は大きくなり、しまいには二メートル程の高さになる。警察は驚き、消防隊を呼べ、等と叫び始め、更に一般人を円と僕達から遠下げる。これはいったいなんなのだ、と野次馬が叫ぶ。人々は警察を押しはじめ、大騒ぎが起こる。そろそろ警察とこれがいったい何なのか知りたがっている人間とのバイオレンスが始まるのか、と思われた瞬間、いきなり円から若い男が登場する。男が来た後、円は一瞬にして炎上しなくなるが、その円を構成するチョークの線は道にまだあった。いきなり登場した男はおおよそ１８〜２５歳だろう。彼は緑の髪に、長身である。残りのスーツとは違い、マントを着ている。それに、彼は袖が下に垂れるような和服のような服を着ている。その服は青い。一番の特徴は、武器を持っていない事であった。彼は何よりも先に周りを見渡し、それが終わると彼は拳銃を頭に突きつけられている少女に語りかける。

「トーラちゃん、久しぶり。前回会った時はアフガニスタンだったかな？覚えているよねえ、なにせそこで君の親衛隊は壊滅したのだから…」
「ベヒーモス！やっぱりこの人たちはあなたの兵だったのね」
「さあ、トーラ。早く創世の書をくれよ。可愛い女の子は、戦いたくないだろう？本をくれれば、今回は許してやる。もちろん、取り返しにきた時は殺すけど」
「絶対にあげない！！」
「おいおい、こっちは人２０人でお前を囲んでるんだぞ。お前は、杖一本とそこのガキだけではないか。勝機があるのか？」
少女は躊躇う。しかし、彼女は首を振り、「やだもん！」と言う。
「さあ、もう諦めな」その男は言う。「私も、君を追いかけるだけが仕事ではないので。面倒は起こしたくないんだ。だから、これ以上血を流す前に渡しなさい」
「そ、そんなことしたら…キミ達が世界を破壊するだけじゃん！！」
「我々が何をしようとも分かっていないのか。我々は世界を破壊するのではなく、新設するのだ」
「それ同じでしょ、このバカァ！」少女は叫ぶ。
「トーラよ、愚かなお前は、この本がただの武器だと思っているようだ。しかし、それは使いようによっては全然違う物となる」
こんな会話に僕はもうついていけない。難しすぎる。
「でもキミ達は明らかに武器として使おうとしているよ！」
「面倒な小娘だ！」ベヒーモスとかの名前の男は小さな魔法の球を指の上に浮かばせ、それを彼女に向かって飛ばす。
「きゃっ！」球が彼女の手に当たり、彼女はスタンガンに当てられたように少しだけ痺れる。しかし、彼女は本を渡さない。
「まだ渡さない気かい？仕方がないなあ」ベヒーモスと言われる男は溜め息まじりに言う。「なら君の隣にいるこいつを殺すか」彼は僕を差しているから、十中八九殺されるのは僕なのだろう。刃が僕の喉元近くに来る。全くお騒がせな少女だ。もうこれはモカを弁償

しろどころじゃないじゃないか！！しかし彼女はすぐに本を落とす。そこを素早くネズミのようにスーツの男の一人が本を取り、片足を膝につかせながら、敬意を払ってベヒーモスに渡す。
「なかなかあっさりだねえ。まあ、その方が、事が楽だからいいか」彼は去り始める。
「絶対にボクのせいでもう人を死なせないって、誓ったの…親衛隊の皆も、ボクを助けようとしてくれた人も、みんな死んじゃった。ボクを守ろーとしてね。グスン」彼女は泣きながら言う。「だから、ここからは…ここからは！」
「まあ頑張りな。私に勝てると言うのなら、やってみな」ベヒーモスは彼女に挑戦する。「しかし、君は今回の私に感謝するのだな。なにせ私は創世の書だけを要求して、他は要求しておらんからな。では、さようなら。トーラ」彼はその本を受け取ると言う。「また会わない事を願うよ。その時は、君の死に直結するかね」
少女は彼を睨みながら、彼が今度はスーツ達と一緒に円の上にまた乗り、消える。
そこからは全てがいきなりであった。彼らが消えた事を確かめると、警察が彼女の回りに来る。え？僕の事？僕はもちろん大事にされる訳ないじゃん。少女が倒れているんだ。で悲鳴を上げて、しまいには泣いたんだ。そうすると、男女老若少女の方にいく。これが人生の方程式。ちなみに数学の方程式が何かは忘れちまった。
「君！大丈夫か？」近くでみていた男性が彼女に駆けつける。
「怪我はない？」他の女性が来る。
たちまち、彼女は野次馬に囲まれ、大丈夫かと言われ続けられる。僕は構われなかった為、すぐに大勢の観衆の中に入り、逃げる。ああ、疲れる。駅まで足が持つかな？本当に疲れていて、駅まで歩けん。だって、今日は５０メートルも走ったんだからな。あーあ、あんな馬鹿な少女に付き合っているんじゃなかった。今頃、彼女はこの異様な事件の事を警察や野次馬に説明させられてるんだろうなあ。そんな事を考えていると、シャツがモカでシミだらけになっている

事を思い出す。あーあ。それもあいつのせいだ。あんなのにはもう関わらないようにしよう。僕が関わる女子はメイド喫茶のメイドみたいな人間がいい。あれは、変な要求をしてこないし（こちら側が変な要求をする事はあるかもしれんけど）、問題はおこさんし、いきなり武装集団と戦わされたりしないし、命は危うくならないし、一番大事に疲れないよ。

僕はこの後、バスになんとか乗り、家まで帰った。無論、その日はすぐに寝た。１キロ以上も歩いたんだ。疲れるに決まってる。５００メートル歩くのも僕にとっては相当な芸当だというのに。疲れていたからだ。僕は、ベッドに倒れ込み、いびきを大きくかきながら、今日がもし普通だったら、と考えながら平和な夢を見た。

しかしなんなのだったのだろうか？創世の書とか、あの魔法のようにテーブルが動いた事とか、いきなり男が炎の中から出てきた事とか、杖からいきなり電撃が出た事とか。あれは全て何だったのだろうか？僕もあんな力があればなあ…人生は流石に違うだろう。そして、絶対にあのトーラと言う少女とか関わらない事にしよう。危険過ぎたよ、全く。

等等と思った僕であったが、僕はすぐに魔法を知る事になる。そして、トーラと言う名の金髪の少女にもまた関わる事になる。それも、自分が思ったよりも近い未来にである。

一章ー金髪の少女と面倒な事件（後書き）

一章終わったあwくだらないストーリですねwwwこれ笑えるのかなwwww笑えたらいいんだけどwwww
これからは章を分割して出します。その方が読者もずっと来るだろうし。次も読んで頂いてくれればありがたいですwwwww

第2章前半（前書き）

ここまでの登場人物：北谷蒋一 ―主人公。社会の底辺の評価を持つ男。エロゲを買おうとしたら戦いに巻き込まれてしまった、ある意味可哀想な人間。

トーラ：一応ヒロイン。主人公をなぜか必要とする金髪の少女。魔法が使える。

ベヒーモス：トーラが所有する本を手下を連れて奪おうとし、成功した魔通師。

タイガーズアイ：橙色の宝石／鉱物。

撃鉄：拳銃を発砲するのを阻止する器具。いわゆるセーフティ。起こす事で銃を発砲できるようにする。

第2章前半

第3章ー本、目的、そして僕の存在

僕はゆっくりと起きた。目をゆっくりと僕は開ける。窓を越して届いた日光が眩しい。ああ、また新たな一日だ。僕は布団をゆっくりと押しのける。まず、僕は時間を確かめる。朝の十時半。平日であるのに、こんなに遅く起きるのはいかなるものかと人々は思うかもしれないが、別に僕は学校にでも行く訳でもないから、別に何も問題はない。次に、僕は天候を窓越しに見る。快い、雲一つもない日だ。きれいな晴れだし（まあ、どうせ僕の部屋に一日中いる僕に取っては関係ないが）。その次に僕がいつも見るものは扉の下に置いてあるとあるありがたいものである。僕の扉の下にある本来ペットにえさを与える為に存在すると思わしき扉の元には朝ご飯が床においてある。僕はその朝ご飯の内容をみる。和風ですな。固い、茶碗の半分も満たさない量のご飯。冷めた、みそが下に完全に沈殿したみそ汁。魚ーいや、5分の4はもう食われている魚だ。後、漬け物は皿だけであった。多分急いで学校に行くため全てを食べられなかった妹の残りものだろう。まとめて、比較的いい朝飯だ。昨日はみそ汁なんか、具がなかったし、ご飯はなかった。母の機嫌がよほどいいのだろう。天気のおかげかな。天気はどんな人種、階級、性格、性別の人間の感情も左右すると言う事は事実だな。ご飯とみそ汁と、殆ど骨だけの魚をコンピューターのある机に持っていき、コンピューターを立ち上げる。

さてさて、誰かなにか掲示板等に投稿したかな？まずは3チャンネルを確かめる。うむ、誰も投稿していないな。ちぇっ、皆学校に行ってて投稿しないのかよ。僕は新たなウィンドウを開けて今度は「顔本」を開ける。こちらも通知はゼロか。誰か返信しろよ。次は「ブヒッター」である。誰か「ブヒ」ってるかなあ…おうなんか来てる。中学のからの友達、高山からだ。

「ふむふむなになに？」僕は思わず声に出して言う。「『俺様は今日からリア充だぜい！お前も学校に行けば、リア充にもなれるかもよ！』ふーん、っててめぇ死ねよ！ついに高山まで勝ち組の方へと歩み始めたか！つーかさりげなく中卒である事をバカにするなあ！」
「だまらっしゃい！」と言いながら母が下から箒で天井を叩いている音が聞こえる。箒で天井を叩いて叫びまくるって、どれくらい古くさいんだよ。
まさか。あの高山が、あの下ネタ大好き変態が彼女持ちとは！ガリレオの法則が無視されてリンゴが木から離れても落ちないのより異常だ！え？ニュートン？ニュートンの法則？そちらだったのですか…じゃあニュートンの法則で。
さて、朝飯も終わった事だし、と思い朝ご飯が乗っていたトレイに全ての食器を入れ、戸の下の方にある、小さな戸を開け、トレイを出す。で、そこの近くにある鈴を鳴らす。チリンチリン。
「あなたが取りなさい」母の声がする。
「え～お母さん、あんな変態オタクニートの部屋なんかに近づきたくないよ～」妹が異議を唱える。なぜ妹がこの時間に家にいるのだろうか。ああ、そっか今日は祝日か。まあ僕にとっては毎日が休みだから関係ないけど。
「お母さんもいやです。さあ、早く取りにいきなさい」
「わかったよ～」妹が不満そうに返答し、命令に従う。
妹がきて、食器を回収する。全く。
このような非常に不便な朝ご飯のシステムがあるのは、母と妹は僕の事をみたくないからだ。ここまで息子が嫌われるケースは、我が家以外にもあるのだろうか？
妹の足音が遠下がる。一階に行ったようだ。いつものように皿洗いだろう。なら僕もいつものように一日を始めるか。
　僕はあらかじめ立ち上がっていたお気に入りから、エロ動画サイトをクリックする。よし。新たな動画が入ったようだ。新たな動画の中から、自分が気に入るような動画を選択し、「最生」ボタンを

クリックする。
「早くロードしろ…」僕は呟き、そして心の中で叫ぶ。よしよし始まるぞ！
「ふ～ん。キミはこんな動画を見るんだ…」聞こえのある声がする。僕は驚き仰天する。なにせ、僕の部屋には普通僕しかいないのだから。
「だ、誰だこのなんとかなんとか侵入者！」このようなときに、もう少し社会を勉強していれば…などと思う。いや、これはもう日本語の問題かな？
「不法侵入者？」
「そうそうそれ。つーか、またお前かよ！」僕が座っている回転式の椅子の背もたれに腕を乗せながらあの少女が言う。
「お前じゃなくて、エレーナだよ！」少女は一生懸命な顔で訴える。
「えれーな？お前、トールとか言う名前じゃなかったっけ？」僕は必死に記憶を探りながら、名前を思い出す。
「トールじゃなくて、トーラ。でも、それはボクのコードネーム。だから、エレーナって呼んで」僕は彼女をもう少し注意深く見る。いろいろなドタバタのせいで、彼女がどんな感じの人だか分からなかったからだ。ショートに切った金髪。ちょっと男の子っぽいヘアスタイルかもしれない。それから、青い目。その目は僕の部屋を純粋な、興味津々な目で見ている。できれば見ないで頂きたいものもあるので、なんかいやだ。彼女は、ある種の制服のような物をきている。それは基本的には白であるが、赤の線が縦にある。また、首の所の外側に青い線が入っている。そして、彼女は白い小さな、上に膨らみのある帽子を被っている。コック帽に似ているかな？外見から見て、１４歳位か？最後に僕は彼女が首から二つものをかけている事に気が付く。一つはタイガーズアイのネックレスであり、もう一つはフラッシュメモリのようなものである。僕はそんな彼女を何となく見る。
「？ボクに何かついてる？」彼女は僕に訊く。

「え？いいやそんな事はない」僕は言う。
「…もしかして」彼女は僕のコンピューターの画面を見る。そこには一時停止してあるエロ動画が全画面に映っている。「ボクの事エッチな目で見てない？」
「は？おいおいちょっとなにいきなりほぼ初対面の人に…」
「そーなの？」
「いいやそれは絶対にない！」本当だ。どうか信じて下さい！
「ふ～ん」彼女は僕を疑うよな目つきで僕の顔を見る。
「んで？何の用だよ。人にモカぶっかけて、銃撃戦に僕を持ち込んで」とにかく話題を逸らそう。
「うん！」うん、ってなんだよ。ふつーそこ謝るだろ。迷惑かけてんだから。せっかく謝るチャンスを与えてやったのに。
「ボク、あそこでも言ったよね。キミが必要だって」
「ああ。どう僕みたいな人間が必要なんだ？」
「キミみたいなダメダメヘタレ中卒ニートが必要なんだよ」
「だから俺の質問に一ってかそれ言い過ぎだろ！つーかそれなんで知ってるんだよ！」
「キミの名前は何？」全く。俺の質問に答えろ。
「ん？北谷が上で蒋一下の名前だが」面倒くさそうに言う。
「そっか」そこで彼女は咳払いをし、大きな声で言う。「キミ、北谷蒋一は魔通師になれるよ！それも、信じられない程の実力の！」
「は？」僕は答える。「まつ牛って何？」
「魔通師！魔通師も知らないの？」少女は答える。「っているか、もう少し驚いてよ…普通誰でもこれ聞いたら、恐れるか喜ぶかのどちらなんだから…」僕はそのまま理解せずに彼女を怪しげな目で見つめる。
「で、そのまつ牛は何すんの？」
「まあ、基本的に魔法を使う人の事だよ」
「それは魔術師じゃないのか？」
「それは古い言い方。魔術師は直接魔法を使うだけの人の事で、魔

通師は魔力を通じて、応用して生活を営む人の事だよ」
「へぇ」基本同じじゃねえか。「で、だったらその応用された魔力ってどんなもんなんだよ」
「う～ん、皆習えばどんな魔法もちょっとはできるけど、皆一つだけ得意で絶大な力を引っ張りだせる魔法を持ってるんだよ。魔通師は、例えばボクだったらこんな事が出来るよ」彼女は確か始めてあった時も持っていた、あの金色の杖を出す。彼女は杖のある部分を開き、そこからは撃鉄のような彼女はその杖を部屋の壁に向ける。丁度、ベッドがある部屋の左隅へと向ける。彼女が撃鉄のようなもを引っ張ると、昨日見たように杖には電撃が溜まり、彼女はその撃鉄から手をはなる事により杖を発砲する。一瞬金色の杖が電気の光を反射し、更に光る。
その後、ガズンと言った爆音に近い程の音が出、次の瞬間、巨大な打撃の音と何かが崩れ去る音が聞こえる。そして、埃と煙が舞上がり、数秒間自分の目の前にあった手も見えない。煙と埃が収まった数秒後、
「なんじゃこりゃあああああああ！！！！！！！」僕の部屋の左隅の壁、床、そして僕のベッドの半分が消えていた。いや、厳密に言えば、部屋の壁は粉砕され、下の庭へと落ちていた。そして、破壊されていなかった部分のベッドが庭へと滑り落ち、ぶっ壊れた。
「うん！これはね、『天空神の小銃（ゼウスズライフル）』って言うんだよ！すごいでしょ！」満面の笑みを浮かべて少女、いや、トール、いや、トーラ、いや、もうはっきり言って名前忘れちまったが言う。
「『すごいでしょ』じゃねえボケえ！修理代どうしてくれるんだよ！大体、これで僕に魔なんとか師がいい印象になったと思ってんのかよ！？一応、僕の家族がこれ払うんだぜ！つーか、こんなに破損された家修復できるかよ！もうお前みたいなボケとは会いたくねえ！」僕はここで間を置き、「お前僕の人生を破壊する為に、僕の人生に介入してきたのか？」答えはない。しかし、荒げな呼吸が聞こえる。その後、シクシクと小さな声も聞こえる。「ん？」僕は彼女

を見る。
「そんなにひど言わなくてもいいじゃん！きみひどいよ！ボクは…ボクは…ただ…」
「僕の家に対空型ミサイルランチャー並の爆風で僕の部屋を破壊したかっただけだ」僕は冷たく彼女の言っていた事を終わらせる。
「うぇ～～ん！」彼女は泣きじゃくる。「だって…だって…こんな事に…なるまでだと思わなかったし…ここまで怒る…と思わなかったんだもん…シクシク」さすがに僕も気が悪くなり、慰めてやる事にする。
「まあまあ、それは済まなかった。確かに僕が悪かったよ。ここまで怒鳴る事もなかったな」こう言い、彼女は少し泣き止む。おいちょい待ち。僕の部屋は粉砕されたのに、なんでボクは粉砕した人に謝っているのだろうか？
「シクシク…シクシク…で…蒋一はどー思う？魔通師になってみようと思う？シクシク」彼女は訊く。
「ん。。。まあ、ちょっとなりたくねー、つーか物破壊して社会問題になりそうな人になりたくねーし…」エレーナ（やっと名前思い出した）はまた泣き始める。
「だ、だから別にここまで…」また泣きはじめた。
「ってか、すまんすまん、言いたかったのはここまですごい事は出来んだろうと思って」彼女はここで一応泣き止む。
「でも、グスン、蒋一なら絶対なれるよグスン」
「え？」この人生でゲーム以外に何も得意でなかった僕が、何か出来るだと？
「うん。蒋一は生粋に純粋だから」
「へぇ！」僕の魔力は生粋に純粋か…確か聞いた事がある。魔力は自分の血に流れている魔力が純粋である程、効率がいいと。え？つーかお前ゲームやり過ぎ？うるさいなあ、「確か聞いた事がある」って言うと、もっとかっこいいんだよ。え？そこが突っ込まれているとこじゃない？

第2章前半（後書き）

受験大戦の砲火が厳しい。。。小説書く暇がない。。。これはただの推敲だから早く終わる筈なのに。。。

第2章後半ー魔通師になろう！（前書き）

組織：魔術師の集団ー平和的な奴や、軍事的な奴もあるが、基本的にどれも戦闘はある程度こなせる。
ＩＡＡＤＭＦ（Ｉｎｔｅｒｎａｔｉｏｎａｌ　Ａｌｌｉａｎｃｅ　Ａｇａｉｎｓｔ　Ｄａｎｇｅｒｏｕｓ　Ｍａｇｉｃａｌ　Ｆｏｕｎｄａｔｉｏｎｓ）ー日訳：国際対危険魔術組織軍事連盟。危険な魔術師の組織（この場合エレーナ／トーラが所属するドラコ組織）を殲滅させる、米国を核とした組織。後から詳細が分かる予定。
これまでのキャラ：北谷蒋一ー主人公。社会の底辺の評価を持つ男。エロゲを買おうとしたら戦いに巻き込まれてしまった、ある意味可哀想な人間。
トーラ：一応ヒロイン。主人公をなぜか必要とする金髪の少女。魔法が使える。使って、蒋一の部屋の壁を破壊する。本名はエレーナ。
ベヒーモス：トーラが所有する本を手下を連れて奪おうとし、成功した魔通師。
北谷琴音：蒋一の妹。蒋一をいつもバカにしている。彼女は彼とは違い、普通の女子高生。

第2章後半ー魔通師になろう！

ガタン。戸が開き、妹が入って来る。
「すごい爆音と共に、ベッドが庭に落ちたから、何が起こったと思ったら…」妹はエレーナに気が付く。「これ何？」
「少女だ」と、当たり前のことを言う。これ何とは失礼でないかと言ってみようと思うが、さっき僕の部屋を破壊したから、ここは助けてやらない。「あんた」妹がゆっくり言う。「どうやって女を自分の部屋に引き込んだの？大量の金を持ってるとか？」
「なんでそう言う考えになるの！？」ていうか、女を引き込んだとか最低の表現の仕方だろ！
「いや、そんな金がわたしのバカ兄貴にある分けないか…」と僕の意見を完全に無視し、自分の推理を否定する。「お金もらったら、すぐにエロゲに使うだけだし」妹は下を俯いて考える。僕の評価って、底辺より下ですね。「まさかあんた、リア充してるとか？」
「僕がしてる分けねーだろ。ここまで魅力のない人間がリア充するか」
「だよね。成績、運動能力、コミュニケーション能力、その他全てで馬鹿な兄貴がリア充する分けないか」
「それ、言い方ひどすぎるだろ」妹は僕の事をまた無視する。
「これといつ会ったの？」
「昨日」
「え゛？」妹はビックリする。
「あ、ボクはしょーいちの事昨日よりけっこー前から知ってたけど…」
「え゛？」
「えそうなの？」僕は訊く。
「うんうん。いろいろな人に訊いて、情報収集して、生粋の純粋な人間を捜したんだ」

「あんた」妹はエレーナに訊く。「これ（僕の事をさす）の何が魅力的に思ったの？」
「うんんと、さっき言った理由以外には別に…」
「あんたゲームオタク？ＣＯＤとか一日五時間位やってる？」
「ううん。ＣＯＤなんてリアルさに欠けるゲームをやって何が面白いの？」
「なんて事を言うんだ！あれほど、現代戦争をあれほどリアルにし、面白くしたゲームはない！信じられんことを言うな！！あの砲弾！銃撃！手榴弾！爆撃機！」僕は熱く言う。しかし、二人は無視する。
「あんたニート？」妹は訊く。「いやニートなら外出しないか社会的な事もしないし」エレーナは首を横に振る。妹はまた一瞬黙り込み、ゆっくりと言う。「あんた、エロ中毒とか？」エレーナは再度首をぶるんぶるん横に振る。「じゃあ、残り考えられるのは！…容姿とか？」妹は一瞬置き、「まあ、容姿だけはお父さん譲りだから悪くないけど…兄貴が女の子を部屋に引き込むのが信じられん」
「僕は引き込んでねーよ！こいつが勝手に入ったんだ！」引き込む、その表現をやめて欲しいな…
「まあ、知らないけど、あんたの修理代、あんたが払いなさいね」
「えっ！？」
「当たり前でしょ。あんたの部屋は、私たちは介入しないから」
「そんな金稼げる分けねーだろ！」
「あんたは金を一銭も稼いだ事がない中卒ダメダメヘタレニートだからね。まあ、じゃあばいば～い」妹は僕の部屋を出る。
　僕はトーラでなくエレーナの方を向く。
「でお前は僕がどうすればいいって言うんだ？」彼女はちょっと気難しく下を向く。
「えっとね。ボク、自分の組織、すなわちボクの所属する魔通師の集まりで正式の魔通師になったばかりなんだ。で、本来は色々な魔通師の所に行って、色々べんきょーするんだけど、ボクの組織は襲われているんだ」

「襲われている？」
「うん。僕達がやっている事が怖いんだ。僕らのやっている事は他の組織（クラン）の破壊に繋がるとね。」わかるわかる。この少女も、ヒヨッコのくせに、僕の部屋を破壊してやがる。「組織だけじゃないよ。国も、そして宗教集団とか。そして、２週間前、米軍、ＵＮ、中国軍、他の有力組織、ユダヤ教会、キリスト教会、そして数個の反乱グループでこーせいされてるＩＡＡＤＭＦっていうグループがボク達をこーげきしたんだ。もちろん、てーこうしたけど、数が多すぎたんだ。ボク達の組織が堕ちた、だからむじょーけんこーふくしたのはボクがたまたま正式の魔通師になる数日前。まだ正式ではなかったから、ボクは殺されなかったんだ。正式になったらボクはもっと偉い魔通師の命令でこの本を持って逃げたんだ。」
「…」僕は無言である。こんな小さな少女が、ここまでの混沌に巻き込まれているとは。
「でも彼らにとっては一人位逃げたって、関係ないんだ。でも、昨日奪われちゃった本は彼らに取って大事なんだ。あれは、ボク達、ドラコ組織の全ての成果、結果ほーこく、発見とかが乗っかってるんだ。あれがあれば、どんな集団も、ボク達並の力が得られるんだ」
「って事は、お前らの組織は滅亡するってことだな。それか、又は一からやり直すか」
「うん。でも、その本を利用して、絶対的な権力を得ようとしている組織があるんだ。ティグリティス組織っていうんだけどね。これは、ボク達に対しての総攻撃の連合軍に味方しているんだけど、実は本を奪って独りじめして、ボク達ドラコ組織の中の人でもホトンド知らない、秘術を使おーとしてるんだ」
「この秘術が使われると？」
「世界の全てが、とあるちょーごーされた薬を飲んだ人たちを除いて、力を失ってしまうんだ。で、飲んだ人たちは飲まなかった人たちの魔力を奪って、その力で、ほぼ生神の様な力を得るんだ。世界は、飲んだ人たちの子へと渡されて、どっかから巨大な隕石が地球

に落ちるまでずっとそうなるんだ」
「え？でも本奪われちまったじゃん！」しかし、僕の低能力の脳がゆっくりと情報をプロセスする。要するに、薬飲めば、僕は世界の支配者になれるんじゃね？そうすりゃ、俺は変な目で見られなくても、好きなだけゲームをやって、アニメを見て、人生を謳歌できるのではないか！よし薬を是非調合して飲んでやる！
「おい、お前」
「エレーナって呼んで」彼女は目を輝かせて言う。
「めんどくさい」
「なんで？」
「知らない、今さっき俺の部屋を破壊した人間をさりげなく名前で呼ぶか？」
「え～だって、でもう」
「うるさい。つーか、上の名前名乗れよ」
「エレーナ」
「それ下の名前じゃろ！？」
「上の名前って、ｆｉｒｓｔ　ｎａｍｅの事じゃないの？」
「違うわ姓名の事じゃ！ボケい！」
「ボケいなんて…ひどいよ…グスン」クソまた泣きはじめたのかよ！うざいったらありゃしない。
「あーあ、ごめんなさい、僕がボケいなんて言ってしまって申し訳ありません」
「そんな事言っても、絶対に、しょーいちの事許さないもん」
「ともかく僕が言いたいのは、別に薬を飲めばいい事なんじゃね？そうすりゃ、好きなだけ人を動かせるし、やりたい放題じゃん」僕はケケケと笑う。
「しょーいちそれひどいよ！まず、薬のざいりょーはすっごく珍しいし、ここの世界の資源では、多くて１５人分位しか作れないよ！作るのも本なしじゃ難しいよ！」
「じゃあ、早速本を探しに！そして資源探しに！連中が取る前に！」

僕は快く叫ぶ。全てを支配できるんだぜ。なんだってやってやるさ！考えているだけで自分の理想する世界が見えて来る。まず僕はスーパーイケメン、勉学なんてこの世には関係ない、セクシーな女性が僕を囲む、そして、文句を言う妹や母はいなく、友達沢山、そして。。。

「ひどいよしょーいち！普通の人をそのまま奴隷みたいに扱うの？」彼女の目には涙が浮かぶ。１４歳にしては、泣き過ぎだろ。「なんでみんな一緒に公平に生きようと思わないの？」

「人生の勝ち組に言われたくないわ」

「ボク勝ち組じゃないよ！」エレーナが反論する。

「思いっきり勝ち組だろ。そんなおっかない物を持ってて」僕は彼女の杖を指す。「それ、誰でも使える訳じゃないんだろ」

「うん…でもボクはみんなの為にこの魔法を使いたいんだ。」彼女はここで少し俯く。確かに。確かに、彼女はこれをある意味僕を守る為に使ったし。。。僕をあの事件に巻き込んだのも彼女だけど。なぜ彼女は僕を守ろうとしたのだろう？これは非常に悲しい事件があり、そのせいでエレーナはこのような行動をいつもとる事を僕は後日知る。「とにかく、こんな理由だから、キミにボクと一緒に本を奪い返したいんだ！」彼女は目を輝かせて言う。

「正直言って面倒だけど、まあ、俺はさっぱり分からんが、助けてやるか。別にやる事ないし」高校行けよ、という声が聞こえるが、もう１７歳の僕が今から行っても意味があるか、とその声を僕は押しつぶす。

「ほんと？」

「ああ、いいよ。俺も魔通師になってみたいもんだし」

「っていうか、キミすぐに魔法が存在するって認めるね」

「まあ、そんなゲームばかりやってるからな」

「じゃあ、明日ボクのおししょー様に会いにいこ！彼の元ならけっこー早く魔通師になれるよ！」

「おう」まあ、この少女がなんだかは未だになんだかさっぱり分か

らんが、まあ僕はどっかのリーマンよりはこの魔通師の方が将来の職業として似合ってそうだし。
「あと、ボク泊るとこないんだけど、ここでいい？」
「おいおい、僕はこの部屋の外に出たらいけないんだよ。お前、どこに泊るんだよ。まさか魔法で自分が透明になるとか？」っていうか、普通男の部屋に泊まろう、と何の躊躇いもなく考えるか？
「この部屋じゃダメ？」彼女は純粋に訊く。
「ダメに決まっとるじゃろ！」僕は少し緊張する。確かにこれは１４歳だ。でも、あの陽光に光る金髪が可愛い。あんなのが一緒に寝ると言うのは、いかなるものか、と僕は考える。おいおい、蒋一君。君はロリにまで成り下がってしまったのかい？い、いやそんなことはない！精神の葛藤が静かに行われる。「なんでダメなの？」エレーナは訊く。
「そ、それは色々と事情があるだろう…異性であるとか」
「それって、問題なの？そうなら、どんな問題？」彼女は訊く。
「そりゃ…」こんな事を説明するのは、恥ずかしすぎる。「もういいよ、この部屋に泊まって」
「やったあ！」
　こうして僕は魔通師になろうという人生を歩み始める事になったのであった。これが自分の人生の全てになると言う事を、その時は知らなかったけど。そして、これがどれくらい危険であるかと言う事も僕は知らなかった。

第2章後半ー魔通師になろう！（後書き）

受験のせいで、書く暇がない。書きたい！そして、読者数を増やしたい！

4章ーカラシニコフさん（前書き）

北谷蒋一：主人公。社会からの評価が底辺に限りなく近い。中卒、ヘタレ、ニート、と三点拍子そろった人間。

トーラ／エレーナ：一応ヒロイン。蒋一に魔法を使う人間、魔通師の存在を教え、彼女が守らなくてはならなかった本を敵に奪われ、蒋一にそれの奪還を助けてもらう事になる。

バハムート：エレーナと敵対する魔通師の集団に属する魔通師。本を彼女から奪う。

北谷琴音：蒋一の妹。普通の高校生。

4章ーカラシニコフさん

僕とエレーナ（絶対に会話中、本名で呼んでやらん）はその朝、すぐに家を出た。え？僕が彼女とその夜なんかやったって？おいおい、これは君達、ロリコンではないのかね？そんな質問は受け付けませんよ。まあ、したとしても、このような物語では発表しませんな。

ともかく、僕は疲れていた。早速エレーナの師匠に会う為、駅まで５００メートルも歩く必要があったからである。全く疲れる。電車に乗ると、金髪だからか、エレーナは特に目立つ。皆がじろじろ見ているのだが、本人は気づかない。全くお気楽な人間だ。幸いな事に、リーマン達が電車に乗り、満員になる頃、僕達はそのまま自分たちがいた席に座るだけでよかった。ここで立たなくてはいけない事になったら、僕はもうダメであっただろう。

その後、何度も乗り換えを行い、そこで僕は初めて彼女にこの質問を訊いた。

「おい、このお前の師匠ってのは、日本国内にいるのか？」

「たぶん」

「たぶんっつーのはどーゆー意味だよ！分かれよ、そんな事！」僕は突っ込む。

「だって…彼、ぎりぎりで隠れなくちゃいけなかったんだもん。れんごーぐんに襲われてから、組織の大事な人はみんなこうかくれているよ。そうじゃないと殺されちゃう」

「…そっか。すまん」僕は謝る。

「青山一丁目～青山一丁目～」アナウンスが聞こえる。秋葉原に住んでいる僕の事だ。相当来た事に気が付く。ここは赤坂だな。確かに、家を外出したのが午前5時半だったというのに、今はもう人々がもう学校でもう授業を受けている時だ。

「あ、良かったね蒋一！ここで降りて、もう電車には乗らないよ！」エレーナが嬉しそうに言う。ああ良かった良かった。
「おう。って、隠れてる所赤坂かよ！もっと村はずれとかにしろよ！国会議事堂から5キロもない所だぜ！っていうか、ここじゃなかったらどこ当たればいいんだよ。。。」
「だからだってさ。そんなふつうの人が隠れるような所に隠れれば、ぜったいに見つからないんだって。ボクのおししょー様はすごいんだよ」彼女は結構強く言う。
「そう言う理屈になるのか…」僕は溜め息をつき、駅を出る。駅は人でごった返しである。そのようなのを避けながら、歩くなんて芸当は僕にとってはとんでもない。「で、もし彼がそこにいなかったらどこ当たるの？」僕は再度訊く。
「そんな事になったら。。。大変だね」彼女は笑顔のまま答える。要するに分からない訳か。全く「大変だ」で済む事なのか？しかし居場所を教えん師匠も、居場所分からなかったときはその時でのエレーナも、絶対にどうかしている。
「おい、トーラ、タクシー使わないか？」僕はそこら中に停まっている車の大群を指す。
「え～なんで？」彼女は簡単に訊く。「っていうか、蒋一もう少し早く歩いてよ～」
「もうだめだ。俺本当にもう歩けないんだ。足が折れるわ」
「まだ駅出たばっかりだよ？これから、彼が隠れていそうな店を捜さなきゃ」
相当冷遇されている弟子だな。まあ、こいつちょっと頭が抜けている所がありそうだからな。敵に情報を教える、みたいな事になってしまったら大変だからな。
「そんな悲しい顔しなくてもいいよ。けっこーけんとーはついてるから」
「おお、それはありがたい。で、どんな所に隠れてるんだ？」
「まったく知らないよ」けろっと彼女は答える。

「おいお前嘘ついたな」
「だから、ボクは彼がどこにいるかを教えてくれる人を知ってるんだ」彼女は説明する。
「なるほど納得だな。で、どこに行けば？」
数分後、僕達は赤坂の繁華街に来、そのまた数分後、キャバクラに入る。
「おっじゃましま～す」エレーナは威勢よく言う。何かが間違っている。
「おい、バカ、こんなとこ入ってどうするんだよ！」こんな所には入れん。危なすぎる。つーか、僕がここに入ったら、違法ではないのか？
「だってこーゆー人たちが彼の居場所をしってるんだもん」彼女はいやそうな顔して言う。
「要するにいつもキャバ通ってんのかよ」僕は溜め息をつく。さあ、入るか。
「いらっしゃい。こんな早くにくるとはねえ。あなたどうしたの？株が暴落とか？嫁に捨てられたとか？」ずいぶんとひどい事言うな、このキャバ嬢。いやらしく、顔だけは美人の人である。「さあ、ここに座って、お若いお客さん」キャバ嬢達は座っていた所を少し開け、二人分程の席を空ける。僕に話しかけてきたキャバ嬢は、腕を肩にかけ、僕を席へと持っていく。
「おい、トーラなんとかしろ」僕はなんとかエレーナに話しかける。
「だからボクの名前はエレーナだって」彼女はちょっと怒りながら、キャバ嬢達に話しかける。
「すみません、ここでグレーのスーツに、平たいちょっと昔風の帽子、そしてチョビヒゲの３０代ぐらいの人、ここにきませんでしたか？」
「あんたは誰？」キャバ嬢達はこれが客でない事に気が付くと、すぐにふつうの口調に戻る。
「ボクは、ちょっと今さっき説明したような人を捜してるんだ」

「う～んそんな人いたっけ？」キャバ嬢は他のキャバ嬢に訊く。
「いないんじゃない？」
「エー、ああそんなのいた！毎日来るあの人の事じゃない？」
「ああ彼ね。最近ここの部屋を借りて、ここで小さな会社を開いてるらしいのよ」毎日くるのかよ。
「確か名刺もらったっけ」キャバ嬢の一人が自分のバッグをとり、ごそごそと中身を探り、名刺を出す。
「これよ」と言い、僕の掌に入れる。ふむふむ。なるほどそこの建物か。その建物は普通のオフィスビルである。しかし結構高いなあ。エレベーターがあるといいのだが。
「しつれいしました～ではさようなら～」とエレーナが言い、僕は軽く会釈をして帰ろうとする。しかし、そう簡単にはいかない。キャバクラだって、一応商売だ。
「ねえ、君」一人が僕の腕に手をかける。
「はい？」
「折角来たんだから、少しここで遊ばない？半額にしてあげるから」な、なぬう！まさかこんなところで女の子と楽しいひとときを！
「是非おねが…」
「しょーいちそれダメ！」そういいながら、この少女は僕の事を引っ張る。そして、引っ張り続け、僕は強制的にこの天国と言われる虚のリア充の世界から出される。
「なんだよ～」僕は文句を言う。あんな楽しい事をお預けにされるとは。
「だって、しょーいちは…しょーいちは！」
「はい？」これは告白されるのでは？彼女は僕が他の女性といるのが嫌なのでは？すげー！最近の僕、もう昔の僕ではないような気がする…
「ボクのおししょー様みたいになりたくないでしょ？」がーん。僕の春は…ないか。うん。ないな。僕は惨めな人間さ。ふん。リア充は勝手ににしてろよ。読者も勝手に笑ってろよ。

「どうしたのしょーいち？そんな疲れた、悲しい顔して？」
「おちびちゃんには分からない、大人の事情さ」お前のせいだ。変な期待させやがって。
「ボク、おちびちゃんじゃないもん！」
「分かった分かった、それより、早く入るぞ」
このような会話があり、その後僕達はエレーナの師匠がいるらしき建物に入る。問題はエレベーターはなく、階段しかなかった。目的地は9階にある。こんな高い所に事務所構えてんだよな～。うん。
「おいトーラ」
「エレーナだよ」
「僕は、もうダメだ。足がこのような苦痛に持たん」
「九階だけだから、がんばろ」
「ちょっとここで休もうぜ～」もうだめだよ。本当に。読者は気付いて、いるかもしれんが、僕、もう文章がまともに言えないくらい。疲れている。
　僕は、なんとか、9階分の、階段を、上った。もう単語区切りでしか喋れねー。え？文節？しらねーよ。なに、それ。
「本当に運動不足だね…」エレーナは僕を見て言う。
「るせーよ」僕は自動的に答える。
　ゼーバー、ゼーハー。しかし疲れたわ。もう少し休んでから事務室にノックしようと思ったが、先にあちらが戸を開いた。
「誰かな、俺の事務所の前でハァハァ言ってるのは？まあ、俺がイケメンであるからしょうがないけど。美少女かなーげ、男だったし。これはヤバい」事務所のナルシスト男はすぐにまた戸を閉める。
「ねえちょっと！」エレーナが問いかける。彼女が戸をコンコン、とノックする。
「子、これは美少女の声！へっへっへっ。どうしたんだい、お嬢ちゃん」気味の悪い声が聞こえる。彼はエレーナの顔を見、落胆したような口調で喋る。「何だお前かーなんだよ用は」彼はエレーナを面倒くさそうに見つめる。

「えっとね…」
「5秒しかやらんぞ〜」
「ええっ！？」エレーナは可愛い顔でそう言う。「う〜ん、えっと〜」
「2秒」
「ちょっと、ちょっと！」
「はいしゅーりょー」声の主はそう言い、戸をバタンと閉める。「っていうわけで、また来週〜」
「だからね、魔通師の素質がありそうな人を見つけたんだ！」
「おいおいそれはマジかよトーラ！人材は反撃には不可欠だからな！」声の主は完全に戸を開け、勢い余って、戸が僕の顔、正確に言えば鼻にぶつかる。いってー！気をつけろよな。このせいで鼻血が…
「ささ、中に入って。君かな？素質があるのは。君も是非入ってくれ」
　声の主は無論、男性であった。白の長髪に、青の目である。目は優しそうに見えるが、すぐに鋭く刺すような視線に変化できそうだ。彼は黒のコートに、普通のコーディロイの長ズボン、そして上は緑のシャツである。見かけが、思いっきり某ファンタジーロールプレイングゲームシリーズ第7作の、隕石を落とそうとして世界を破壊しようとした悪役に見える。
「ん？」彼は鼻血が出ている僕を見る。「お前、エロ本でも読んでたか？ここに来るまでで読んでた？」
「え？」僕はいきなりびっくりする。
「う〜ん、でも本を読んでない所から見て、こりゃ、妄想だな。すげー妄想野郎だな、妄想で鼻血が出るとは」
「しょーいちはコンピューターでなんか変なものをいっつも見てるよ」エレーナがついでに付け足す。
「違うわこれはお前が戸を僕の鼻にぶつけたからだ！」僕は必死に抗議する。「それに僕は常時そんなものを見てる訳じゃない！」
「えそうなの？なんかどうしようもないいい訳だなあいやあ、そん

な言い訳通らないぞ…」彼はワハハと笑い、僕を無視する。早速またいやなやつだ。エレーナみたいに物を壊す恐れはなさそうだけど、これもうざい。魔通師というのは、全部こうなのか？
「まあ、戸がお前の鼻にぶつかったという事にしてやろう」
「だからそれが真実だったんだよ」
「で、トーラ。こいつはどんな力を持っている？魔法についてどれくらい教育されてる？戦闘はこなせる？」
「わかんないけど、ものすごいバカだよ。ヘタレで、使えないよ」
「…で、素質の方は？」この男でさえエレーナには太刀打ちできないようだ。「っていうか、使えないならなんで持ってきたの？」
「だから、それが素質じゃないの？」エレーナは訊く。
「いや、素質は純粋な力だが」
「うん」そこで明らかに違ったことを言ったのにうんとは…「だって、純粋って言ったら、何もない、無に近いことでしょ？だったら、できる限り普通のことができない人が純粋でいいよね！生活能力がいかに「無」に近ければいいんだよね！」エレーナは嬉しそうに言う。流石エレーナであると僕は思う。
「ああ、なんで俺はこんなバカをドラコの魔通師にしてしまったのだろうか。このバカやろう。ふつーに、純粋ってのはなあ、能力の純粋な力だ。俺がお前を教育していた時、俺はお前に初めてに教えた、魔術の基本中の基本と言うのは？」
「ひどいよ…バカやろうなんて…グスン」
「質問に答えろ」そして泣きそうな少女を無視した～～～！！この人達の会話能力が、果たしてこいつらを魔通師にするのだろうか。
「蒋一、この人ひどいでしょ？」そして僕をこの会話に巻き込もうとしてるよ～これは危険以外の何でもない。
「う～ん、そうでもないと思うけど、お前の言う事も一理あるかな？」僕は中立を保つような意見を言う。これなら、どちら側も味方してない、
「ひどいよ蒋一なんかだいっきらい！」筈だったのだが。そして、

僕を一発ぽこんと殴る。
「お前、覚えてないだけだろ？」男が言う。
「そ、そんなことないもん！」エレーナが反論する。
「じゃあ、俺が最初にお前に教えた事は？」
「う～ん、えっと…」彼女は黙り込む。
「はぁ。やっぱりお前を魔通師にした俺が馬鹿だったわ。お前、俺が今こんな所で隠れてなきゃ、絶対に見習いに戻してまた一から勉強だぞ。最初に言った事は、魔力は血の中に流れていて、その魔力は全ての人間に均等にある。ただ、その内容の種類が様々である為、普通の人間はまともにいわゆる『能力』魔法を使えない。種類がある程度から完全に統一されている人間は、『純粋』、つまり純度が高い人間だ。純粋であればある程その能力をより上手く使えるのさ。まあ努力次第ではその能力をより上手く扱えるようにもなるがな」
「だって…それで、純粋な人を東京で知らない、って訊いたら、みんな蒋一の家を指して、そこのバカ息子ならそうだよ、っていったんだもん」そしてこのひどいコメント～本人の前で、お願いだから、言わないでください…
「僕って、東京都全地域に知られている程のバカなんだ…悲しい…」
「そっか。まあそうならば、バカを俺は必要としない。魔通師は楽々と知られてはいけない集団だからな。まったく可哀想な奴だ。バカな少女に引っ張り回されて。口封じの為だ」彼は僕に銃を向ける。あ、これは…ＡＫ４７だ。ソビエト連邦の１９４７年産アサルトライフル、７．６２弾×３０発マガジン、銃剣装備可。色々なバリエーションが存在し、今でもこのオリジナルが反乱組織で使われていたりする。って、オタク情報が～～。ヤバスヤバス。ガンアクションゲームのやりすぎだあ～～！
「お前、これが怖くないのか？」男が感心する。
「…いや、今いきなりＡＫについての様々なオタク情報が脳を横切った為…」僕はバカ正直に答える。
「…そうか。まあ、あの世に逝った時は俺を恨むな。ここにお前を

連れてきたトーラを恨め」
「エレーナだよ！」そんな所突っ込んでる暇あるならこの状況なんとかしてくれ～～。あれ？なんかこのＡＫおかしい。って、あははははは
「で、君はそんなＡＫで僕を殺すつもりですか？マガジンも入っていないそんなＡＫで？」
「大丈夫だ、こいつは魔法によって自動的に俺の魔力を引き出し、エネルギー弾に変えて、７．６２弾が持つ数倍の力でお前を血まみれにするからな」
「…そうですか…全く、残念な人生だったなあ…」
「だな。そろそろ余談は終わりにして」彼はサイトを覗き、射撃を始めようとする。こんな至近距離でサイトを覗く必要性があるか、と言う事を少しだけ突っ込みたくなる僕である。
「ねえ、せめて、魔力の純度だけ確かめてみようよ…もしかしたら、本当にバカでも、純粋かもだよ」さすがエレーナ！ちゃんと大切な所を理解している聡明な少女だ！壁を破壊した事も水に流してやる！
「そ、そうですよ！本当はものすごい魔力の持ち主であるかもしれませんよ！！！」
「…はぁ」男は溜め息をつく。「やってもいいけど、たとえこいつの魔力が純粋であっても、お前はもう見習いに下げておくぞ」
「わかってるよ～」エレーナは不満そうに言う。男は小さな針を使い、僕の皮膚に刺す。
「いだっだだだだだだ！麻酔はどこいったんだよ！注射する時、普通麻酔するだろ！麻酔してくれよ～」
「お前は、ＡＫが向けられているのは大丈夫で、針にさされるのが怖いのかよ」
「麻酔なんて、手術でしかしないよ」エレーナも付け加える。「ほんとうに、ヘタレだね」彼女は嬉しそうに言う。ひどいよ。
　血が数滴出て、それを男は試験管に入れる。その試験管にヨウ素液のような色をした（あれ～、紫だっけ、それとも反応すると紫に

なるんだっけ）液体と、水を少し、そして最後に何らかの白いの粉（麻薬かなあ～へへへ）を入れた。それを加熱し、全てが沸騰し続けるまで待った。数分程経った後、液体は全て蒸発し、彼は試験管に残った、しかし変色した粉を出す。粉は緑色に変色されていた。
「で、ここでしつも～ん。トーラちゃん、」男はいきなり陽気に言う。
「エレーナだよ」いつものように本名を言う。
「トーラちゃん、これはどういう意味かな？」彼は緑色の粉を指す。
「ふん。エレーナって呼ばなきゃこたえないもん」
「そう呼んだって答えないくせに。だって答えられないからな～」
「呼ばないとダメだよ～ん」
「早く答えなさい」彼はエレーナをぽこんと殴る。
「そんな簡単な質問簡単に答えられるもん、殴らなくてもいいじゃん」
「で、答えは？」
「。。。。。。。。」頑張れ、エレーナ。「その粉の色は蒔一が炎の力を持ってるってこと！」
「だめだ。お前絶対に見習いに格下げだな」
「だって～、こんなどうでもいいこと、テストの為にしか覚えなかったもん！」
男は僕を見つめ、「うん。君には魔力がある。だから、これはもういらないな」彼はＡＫを放り投げ、それは事務机の上にがちゃんと落ちる。銃の扱い雑だなあ。「しかし僅かな量だ。それでも一応魔法を使えるらしい。それに、どんな僅かな力でも、鍛えればある程度の力に成長するからな。反撃する兵は一人でも多く欲しいし」
「ってことは、僕は死なないの？」
「ああ。そうだ、お前、これまでの人生の中で異様な体験をした事があるか？もしかしたらそれが能力魔法かもしれんからな」僕は首を横に振る。「そうか、なら能力は未確認でしょうがないな」
「ああ。お前は俺とここのバカが鍛える」彼はエレーナを指しなが

ら言う。「まあいつかドラコ組織の魔法学校にでも行かせて、そこで勉強してもらうさ。ああ、ちなみに俺の名前はカラシニコフだ。君は蒋一でいいね。そういや、君にもじきにコードネームをやるから」

「よろしく御願いします…」僕は言う。ってか、カラシニコフって…AKのKじゃねーか！！！

「んーでだな、」男が言う。カラシニコフなんて絶対に呼ばねえ。つーか、これで僕は全てのキャラを本名で呼ばない事にしているのかなあ…「まず、魔通師であると言う事は、多分ここのオバカー」

「おバカじゃないもん、白髪のバカ魔通師！」

「が伝えた筈だと思うが、お前は常時国の兵士、他の魔通師、金とかで釣られた不良／チンピラ、その他様々な武力を持っている集団に教われる。で、魔法教育ゼロで能力魔法もゼロじゃ瞬殺だからな。お前が使えそうな武器を数個選んだが…なんか気に入ったのを選べ」そこには色々な武器があった。例えば、僕に一番近いものは、両刃のナイフ、そしてその右には斧。その斧の下には拳銃がある。壁にもたれかけていたのは刀のようなもの、弓矢にライフルである。とにかく様々な武器があった。

「じゃあ、まずはこれを使ってみな」彼は僕にナイフを渡す。「このナイフは魔法によって特殊に加工されていて、風の力を刃に加えて、強靭な鎧とかも切り裂く事もできる」僕はナイフを振ってみる。重い！クソ重いよ！

「そんな情けない振り方じゃ、効果は発揮されんぞ…もうちょっと筋肉使って頑張ってみなよ」

「いや…今日ちょっと結構運動をしたので…」カラシニコフはエレーナの方を見る。エレーナは溜め息をつき、次の武器を指す。

「これは…まあ、俺の銃と同じく、自分の魔力を弾として撃つやつだ」僕はそれを取ってみるが、「ああ、いいよそれは。とんでもない反動があるし。君の筋力じゃ使えないと思う」

「ああ、そうですか」僕はちょっと悲しそうに返事をする。

「このメイス…アチャこれも筋肉必要だわ…この剣はとんでもなく重いし…う～ん、この手榴弾を使うには遠くに投げなくちゃいかんし…」ふむふむ。どうやら、僕は筋力がなく、どの武器も使えんらしい。「この弓はちょっと開発途上だし、うん、このスナイパーは無理だな…ああ！これがあったか！！！」彼は叫ぶ。ん、どんな武器だろう！？僕でも使えるような、扱いやすい武器なのだろうか。

「筋トレマット～～～～」ん？この武器は青い長方形の集合体であった。全部折り畳めるようになっている、よく体育館にあるやつ見たいな形だ。

「ふ～ん、これ、どうやって使うんだい？相手をこれで殴ったら相手が吹っ飛ぶとか？」

「いや、これは君の一時的な武器だ。これは、ここで腕立て伏せをやったり、腹筋を鍛えたりすると、いつあるかわからない未来の戦いでこのマットの魔力が君を強化する！」カラシニコフは堂々と説明する。「そして、ここで様々な筋トレをする事によって、他の武器が扱えるようになる！」

「要するにただのマットやろ！！もう直接にどの武器を扱うにも筋力足りんと言え！」

「と言う事だ！」カラシニコフさんはあっさり僕のツッコミをスルーする。魔力を発動する為、ここで腕立て２０回だあああ！」２０っ回？そんなバカな！２０とは！

「あのう…２０とは人間の力を越す程の量では？」

「ふつーの人間なら、ラクラクにできるよ」エレーナが挟む。

「まさか」わっはっはと僕は笑う。「人間、そんな神のような存在でないぞ。一回やるだけで相当疲れるからな」

「しょーいちの筋力がひどすぎなんじゃないの？」

「じゃあお前がやってみろよ」

「いっち、に、さん、し、」エレーナはマットの上で腕立てを始める。つーか、なんだこの能力は！？もう八まで行ってる！！？早速僕もやってみる。うっ！腕に体の重さが！くっ、下までいった。よ

し！今度は上がるぞ！！！き、厳しい！しかしここで蒋一は挫けない！ここで彼は全ての力を投入し、
「うおおおおおおおおおおお！！！」腕立て伏せを成し遂げた！！
「ボク、２０回やったよ」げ、三年下の少女に、あっさりと負けた。それも、彼女は僕が１回やった所で終わってた。僕、悲しい存在だな…
「トーラ、お前はなんでマットを使ってんだ？これは蒋一の武器なのだが？」まだ武器だとかいってるよ、この男は…
「だって、ボクはここで筋トレすればつよーい魔力がボクをまもってくれるんでしょ？」マジでこれを信じてたバカがいたあああああああ！
「ああ、まあそうなんだけど…」カラシニコフは言う。「絶対に見習いに落とそう」と彼は後で呟く。
「あの、これはなんですか？」僕は短い棒ののような長さのどうでもよさそうな物が武器の中に紛れ込んでいる事に気が付く。
「あ。。。これはねえ…」カラシニコフが言う。「開発途上だけどねえ…マットよりは強いしねえ…まあ、じゃああげるよ」
「あげる？」
「多分使えないから。使えたら強力だと言われて、大量生産されたけど、誰もこの武器を発動させる魔力を持っていないようでね…ここの多くの武器は魔力で強化されているから、相性の問題があるのさ」
「どうやって使うのですか？」
「その棒の一番下の方に起動スイッチがある。押してみな…」僕はそのボタンをポチッと押す。すると、なにかすごい痛みが腕に走った。何かが消えるような感触だ。。。そして、次僕がその棒を見た時は、
「おおおおおお！」エレーナが関心の声を上げる。
「え。。。マジかよ！？」カラシニコフも驚いているようである。
当然だ。だって、この棒からはなんと緑の刃が出ていた。

「僕はなんかすごい事したんですか？」
「この武器を発動できた初めての人間だからな、まあすごい事だ」
カラシニコフは新たな眼差しで僕を見る。
僕は試しにこれを数回、周りに被害が出ないよう気を付けて（僕はエレーナみたいに人のものを破壊したくないから）、振ってみる。
「これなら軽くて、使える！」
「ならこの武器でいいな」
「はい！ありがとうございます！」
「これで、一応お前もドラコ組織の一員だ。そうだな、これを機に他に日本に逃げ込んだ魔通師達を招集するか」
「もっといるんですか？」
「ああ、都内だけで多分四人程いると思うぞ」
「日本にも学校を建てた方がいいしな。まあ、お前が心配する事じゃない。お前は、呼ばれたら、すぐに他の魔通師と一緒に俺の所に集合する事だ。それから、トーラもちゃんと持って来る事だ」
「彼女は、いつもは来ないのですか？」
「いや、本来は来る筈だけど、よく忘れるんでね。忘れないようにお前が奴を持ってこい、って言ってるんだ」
「ボクはいつも来てるよ」エレーナは自分を守ろうとする。
「嘘付け。とにかく、じゃあ明日お前らには八王子駅で待ち合わせだ。午前十時までには来てればいいさ。じゃあ、またな」
「ありがとうございました！」魔法使いか…なんかかっこいいな。
「ボクはいつも呼ばれたときは来てるもん！」誰も話題にしていない事をエレーナが話し続けながら、僕達は僕の家に戻った。

4章ーカラシニコフさん（後書き）

更新が遅い事、すみません（＞＜）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9776y/

託された魔通師と守った魔通師

2012年1月5日07時45分発行